

ハーバート・リードとリトミック教育に関する一考察 — 『芸術による教育』を中心に—

A Study of Herbert Read and Eurhythmics: Focusing on “*Education through Art*”

入 江 眞 理

はじめに

- I. リード略歴
 - II. 時代背景
 - III. 『芸術による教育』
 - IV. 『平和のための教育』
 - V. 『芸術教育による人間回復』
 - VI. 考察
- おわりに

はじめに

イギリスの美術批評家、文芸批評家、詩人でもあるハーバート・リード(Herbert Read 1893-1968 以下リードと表記)は、精神分析理論を文芸・美術批評へ取り入れ、社会政治思想としてはアナキズムを背景に、芸術教育に関心を持つに至った。主著『芸術による教育』(*Education through Art* 原著1943)は、『平和のための教育』(*Education for Peace* 原著1949)とともに広く読まれ、戦後の芸術教育運動において指導的な役割を果たした。リードは『芸術による教育』において、「芸術を教育の基礎とするべきである」¹⁾ことを命題として掲げている。これは、教育における芸術の機能に関するプラトン(Plato前427 - 前347)の観点であるとして、その命題を心理学、哲学など様々な角度から立証している。その中で、リードはエミール・ジャック＝ダルクローズ(Emile Jaques-Dalcroze 1865-1950 以下J＝ダルクローズと表記)について、1節を割いて言及している。J＝ダルクローズが創案した音楽教育の方法であるリトミックを「体のあらゆる動きと表現との協調」であり「賞賛すべき」²⁾と記述し、プラトンの教育の理想を実行に移

すものと捉え高く評価した。リードは『芸術による教育』において、リトミックを「音楽」と「運動」の教育を担うことができるものと位置づけたのである。

リトミックの創案者であるJ＝ダルクローズは1865年、ウィーンに生まれた。幼少時から親しんだ音楽を本格的に学び、ジュネーブで、和声学³⁾、ソルフェージュ⁴⁾の教授職に就く。学生に指導する過程で、音楽を分析し、知的に理解させる伝統的な指導方法に疑問を抱き、その当時、音楽教育の方法としては画期的ともいえる身体運動を取り入れ実践を重ねた。J＝ダルクローズは、最も感覚に訴え、生命に最も密接に結び付く要素はリズム⁵⁾と動きである⁶⁾と考え、クラパレード(Edouard

1) Herbert Read, *Education through Art*, London, Faber, 1943, p.1

2) ハーバート・リード著、宮脇理 岩崎清 直江俊雄訳、『芸術による教育』、フィルムアート社、2001、p.85

3) 和音や和声を分析し、系統立てる理論的研究を指す。

4) 音楽における基礎教育。読譜、聴音などの能力を養う。

Claparede 1873-1940)⁷⁾の助言によって心理学的な裏付けを得て、音楽を深く理解し表現するための音楽教育法「リトミック」(rythmique 仏、eurhythmics英)を体系化した。リトミックは、この時代の新しい教育の隆盛の中で、改革的な教育の実践であり理論であるとして、音楽だけでなく、演劇、舞踊など様々な分野で注目を集めたのである。日本におけるリトミックは、導入されてから現在まで約100年が経つ。幼い子どもの音楽教育、子育て支援、小学校・中学校の特別支援教育、保育者養成のための演習科目、音楽療法、高齢者の身体機能維持などにも取り入れられており、乳幼児から高齢者までを対象に、その内容や方法は多様化している。J=ダルクローズは実践の過程で人間教育としてのリトミックの可能性を確信していったが、現在の日本における様々な分野での普及の現状は、彼の確信を裏付けるものといえる。

日本で『芸術による教育』は、戦後の美術教育における根本理念であることが広く認められており、美術教育界に与えた影響は大きい。しかし、今日までの美術教育界での研究の広がりや比べ、音楽教育界においてはリードの視点からのリトミック研究はほとんど見受けられない。そこで、本研究では、リードの著作における記述を基に、リードがリトミックをどのように位置づけていたのか、その見解を考察することを目的とする。リードの視点からリトミック教育の意義を明らかにすることによって、音楽教育にとどまらないリトミックの人間教育としての新たな側面が確かめられるものと考えている。

5) J=ダルクローズは、スイスの音楽教育家リュシー(Mathis Lussy 1828-1910)から彼の音楽教育理論の決定的な基礎となる音楽のリズムについて学んでいる。リュシーは、表現を生み出すのはリズムと拍子であるという認識を基に、リズムの定義を明確にし、リズムを表現するための具体的な方法を示した。拍子とリズムの要素の融合によって理論と感覚が調和し、音楽が理解されるという考えは、歩行によって時間を均等に分割して小節のモデルとしたダルクローズのリトミックの根底に反映されている。

I. リード略歴

リードは、イングランドのヨークシャー州に農業を営む両親のもとに生まれた。少年時代、彼が過ごした農家ででの生活やそれらを取り巻く自然の中での体験を、晩年の著書、『ハーバート・リード自伝』(*The Contrary Experience* 原著1963)⁸⁾「第1部 無垢の眼」の章で詳細に書き記している。リード自身、彼の感受性はこの時代の自然環境や、農業を営む両親の生活と習慣によって育まれたものと確信していた。⁹⁾

10歳の時、父親の死によって家庭の事情は大きく変化し、孤児院に入ることとなる。厳格で宗教的な傾向が強かった中等学校での生活では、規律に従うことが求められた。卒業後、工業都市リーズの銀行に職を得る。政治的な関心をもち始めたのもこの頃である。その後リーズ大学に入学、幅広い科目を履修した。大学図書館でニーチェ(Friedrich Wilhelm Nietzsche 1844-1900)の著作に出会い、「あらゆる状況を考慮しても私が後悔しない出発点だった。」¹⁰⁾と述べ、ニーチェの思想は知性の出発点であるだけでなく、その後の思想にも大きく影響したと認識していた。

1914年、21歳の時に軍隊に召集された。前線での過酷な状況においても様々な分野の本を手にし、思想、社会、政治について思索を続けていた。その後、軍隊を離れ公務員となるが、多忙な生活は彼の文筆業に支障をきたしたため、美術館勤務を願い出て配属された。

6) エミール・ジャック=ダルクローズ著、山本昌男訳、『リズムと音楽と教育』、全音楽譜出版社、2003、p73

7) スイスの心理学者。機能主義の立場に立ち、教育実践家として「J-J・ルソー研究所」を設立、ヨーロッパにおける新教育運動の運動家でもあった。彼の考えは、人間の精神活動を環境に適応しようとする有機体の主体的行為として把握しようとするもので、子どもは刺激に対して機械的に反応する受動的な存在ではなく、自らの内在的な欲求や興味によって刺激を探索・選択し、外界と自己の関係を最適なものとして創り出す創造的で主体的な存在としてとらえた。

8) H.リード著、北條文緒訳、『ハーバート・リード自伝』、1970、法政大学出版局

9) リード著、『ハーバート・リード自伝』、p.178

10) リード著、『ハーバート・リード自伝』、p.201

この時の陶器に関する研究が、後の美術評論家としての視点に活かされることとなった。美術評論家として多数の記事を週刊誌に執筆する一方で、トマス・スターンズ・エリオット(Thomas Stearns Eliot 1888-1965)とも、詩についての信念に一致するものを見て親交を深めた。1931年、エジンバラ大学にて美術講座を担当し、翌年にはリーズ大学より名誉文学博士を授与された。

リードは、文学や芸術においてロマン派と古典派の対立が激化し批評の思想も分極化していた時代に両者を支持したことで批判もあった。しかし、彼の中で両者は相互に従属の関係にあり、二者択一の過程ではなく、1つの創造過程における両極であった¹¹⁾。また、シュールレアリスム¹²⁾に接近し、ファシストのスペイン侵攻に反対する活動に署名している。

1940年にはロンドン大学レオン特別研究員となり、教育制度における芸術の位置づけについて研究をした。その研究をまとめたものが、1943年出版の『芸術による教育』である。この研究のために数百枚の子どもの絵画を集めて分析したが、その過程でユング(Carl Gustav Jung 1875-1961)の典型的なイメージの現象的証拠を見出して衝撃を受けた。この経験によって、ユングの理論は彼の思想を基礎づけるものとなった。「すべての人間がある種の芸術家」であり、あらゆる子どもの生来の創造的な能力を集団生活の限らない豊かさに貢献するように促さなければならない、という考えに至ったのである¹³⁾。同時に、教育の目的とは個人の特性の発達をうながすことであり、成長の過程は、客観的な世界に対する主観的な感覚や感情の非常に複雑な適応であって、思考や理解の質およびあらゆる人格や性格といったものが、この適応の成功やそ

の正確さにかなり依存している、ととらえた。したがって、「教育のもっとも重要な機能は、この心理的な方向づけ(orientation)に関わっており、それゆえ、美的な感受性の教育が根本的な重要性をもっている」¹⁴⁾との見解に至り、『芸術による教育』を著し総括した。

II. 時代背景

18世紀、イギリスは最も早い時期に産業革命を成し遂げたことを背景に、世界的に領地を拡大した。世界各地の植民地はイギリスの市場となり、農村技術の進歩による余剰人員が安価な労働力として産業革命を支えたのである。しかし、19世紀初頭には産業革命以来のさまざまな矛盾が労働者の間に不満を生じさせていた。その不満を解消するため、政府は、信教の自由化、選挙法改正、公教育体制の整備などを行った。労働者階級をまきこんだ改革が漸次的に進んだのである。このような時代を背景にリードは問題意識を高め、政治が彼の関心事となった。しかし、「塹壕のなかで、死は(中略)何百回と繰り返して生じる可能性」¹⁵⁾であった、と記しているように日常的に死と直面せざるを得ない凄惨な戦争を2度も体験する。リードの戦争体験は、生命を脅かされる恐怖と同時に自らもまた生命を脅かす者として存在する不条理の経験でもあった。さらには、「世界の労働者たちが団結して行動せず、彼らに不幸と身体の苦痛のみしかもたらさぬ戦争をふせげなかった」ことに加えて、「戦争終結の際、戦争を誘発し促進した政治家や資本家たちを追放しようという全世界的な願望が見られなかった」¹⁶⁾ことに衝撃を受け、失望する。その結果、政治的にはある種の諦念を抱き「行動に生きることと、思索に生きること、このふたつの体験は永遠に相容れない。」¹⁷⁾と政治的な活動とは距離を置き始める。しかし、人間や社会が抱える

11) デーヴィッド・シスルウッド著、上野浩道・西村拓生・池亀直子訳、『ハーバート・リードの美学 形なきものと形』、2006、玉川大学出版部、pp.13-14

12) surréalisme(仏) 第一次世界大戦後のフランスに起こった芸術思想の1つ。フロイトの深層心理学などの影響を受け、非合理的なものや意識下の心象を表現する方法を主張した。超現実主義。

13) デーヴィッド・シスルウッド著、『ハーバート・リードの美学 形なきものと形』、pp.138-139

14) リード著、『芸術による教育』、pp.24-25

15) リード著、『ハーバート・リード自伝』、p.55

16) リード著、『ハーバート・リード自伝』、pp.54-55

17) リード著、『ハーバート・リード自伝』、p.60

矛盾や課題に対する答えを模索し続け、平和な社会の実現を希求した。晩年著した自伝において、「もしわれわれがもう一度自然と共に生きることを学べば、もしわれわれが放蕩息子のようにその美しさに再び思いをいたすならば、われわれの疎外と怖れは終り、ブレイク^{引用者註：18)}が、恵みと憐みと安らぎと愛と呼んだ喜ばしい徳に、われわれは戻れるである

う。」¹⁹⁾、と詩人の言葉を借りて表現している。この言葉に象徴されるように、農家での生活や恵まれた自然環境という「美しい世界」とともにあったリードの幼年時代は、彼の個性と思想を形成し、それらは、2度の戦争や社会の矛盾にさらされながらも、彼の基盤として揺らぐことはなかったといえる。

表1 リードとJ=ダルクローズの略歴及び時代背景

	リード	グレート・ブリテンおよび北アイルランド連合王国	J=ダルクローズ
1865			オーストリアのウィーンでスイス出身の両親のもとに生まれる
1893	イングランドのヨークシャー州の農家に生まれる	「大不況」と呼ばれる慢性的な不況期 (1873-1896)	ジュネーブ音楽院、和声学の教授に任命される (1892)
1903	父親の死。孤児院に入る。読書を楽しみとし、書くことへの興味が芽生える		「体育の基本的要素が、音楽のリズムに基礎を置いている」ことを明言 (1904)、リトミックの方法を確立
1908-1912	中等学校を修了。リーズの銀行に就職。夜間学校に通い、大学受験に備える。政治的な関心をもち始め、保守党の地方支部に加わる	「自由貿易と保護貿易、アイルランドの自治、国教の廃止、上院の改革といった大問題」 ²⁰⁾	ジュネーブ大学の名誉博士となる (1910)。ヘレラウのジャック=ダルクローズ学院に着任 (1911)、イギリスからバーナード・ショウらが訪れ、リトミックを賞賛
1912	リーズ大学入学。英文学、仏文学、論理学、法学、経済学等広く学ぶ。将校訓練隊に入隊		イギリス巡回公演、子どもの実技に教育家、音楽家たちが賛同 (1912)、ダルクローズ・リトミック・ロンドン学校が設立される (1913)
1914	軍隊に召集される	第一次世界大戦参戦	ヘレラウのジャック=ダルクローズ学院閉鎖される (1914)、ドイツ軍のランス寺院砲撃に対する抗議文に署名、ドイツから非難される
1915	将校としてドーセットシャー州に配属。初めての詩集、 <i>Songs of Chaos</i> を出版		ジュネーブにジャック=ダルクローズ学院創設 (1915)、イギリスのロンドン校に年に2回、講演と講義を行うことになる
1917-1918	サンディカリズムとギルド社会主義に関する論文を公表する		
1918	フランス、ソナムからの退却で生き残り、受勲する		
1919	除隊し公務員となる。文芸雑誌『美術と文学』の編集に関わる	ヴェルサイユ条約締結	パリのグランド=オペラがリトミックを取り入れる
1922	ヴィクトリア・アルバート博物館に管理助手として転勤。陶器科に配属される	自治領としてアイルランド自由国成立	論文「リトミックと盲人教育」をまとめる。(1920) リトミックの体系が治療の方面に拡大
1923	詩集 <i>Mutation of Phoenix</i> を出版。その他雑誌にも寄稿		
1924	英国陶器に関する初の近代的分類の著作 <i>English Pottery</i> 出版 (共著)		イタリア、トリノで講演、リトミックが発展をみる
1928	英語の散文体、修辞法の手引書 <i>English Propose Style</i> 出版		第1回リズム会議、ジュネーブで開催 (1926)
1929	<i>The Meaning of Art</i> 出版。美術に関する記事を週刊誌に多数執筆		ドイツに戻る。ポーランド巡回。ベルリンの音楽大学で講演 (1927) ジュネーブの小学校でリズム体操がとり入れられる (1928)
1931	エジンバラ大学の教授に就任		スウェーデン王立アカデミーの会員としてストックホルムの音楽学校で講義 (1930)

ハーバート・リードとリトミック教育に関する一考察

	リード	グレート・ブリテンおよび北アイルランド連合王国	J=ダルクローズ
1932	リーズより名誉文学博士号を授与される		
1933	美術誌雑誌 <i>The Burlington Magazine</i> の編集者となる		
1934	<i>Art and Industry</i> . Henry Moore 出版		スウェーデン体操の王立学院が「根本的な重要性をもつもの」としてリトミックを採用(1934)
1937	<i>Art and Society</i> 出版。ファシストのスペイン侵攻に反対し国際平和キャンペーンに署名		シカゴ大学の名誉博士となる (1936)
1938	<i>Poetry and Society</i> 出版		
1939		ドイツがポーランド侵略。宣戦布告。第二次世界大戦	
1940	ロンドン大学レオン特別研究員となる。教育制度における芸術の位置づけについて研究		
1943	<i>Education Through Art</i> 出版 <i>The Politics of the Unpolitical</i> 出版		
1944	<i>The Education of Free Man</i> 出版	ノルマンディー上陸作戦	
1945	<i>Anarchy and Order</i> 出版	ドイツに続き日本降伏。第二次世界大戦終結	ローザンヌ大学から名誉博士資格を授与される
1946	アメリカ、イェール大学で講演、モホリーナジと会う。エラノス会議でユングと会う	イングランド銀行国有化	第1回ジュネーブ市賞(音楽部門)受賞
1947	Institute of Contemporary Arts 初代所長に就任		
1949	<i>Education for Peace</i> 出版		イギリス政府がダルクローズ・トレーニング学校を認可する。ニューヨークのダルクローズ音楽学校が合衆国の最優秀音楽学校の1つに認められる。フランス、クレルモン＝フェラン大学の名誉博士となる
1952	<i>The Philosophy of Modern Art</i> 出版		ジュネーブにて84歳で死去(1950)
1953	文学への功勞によってナイトの爵位を授与される		
1955	<i>The Grass Roots of Art, Icon and Idea</i> 出版	すべての食料配給制終了(1954)	
1956-1959	カナダ、スイス、イタリア、合衆国、中国を訪問。各地の大学で講演活動	核兵器廃絶キャンペーン旗揚げ。ノッティンガム・ヒルで人種暴動	
1961	核戦争反対運動に参加	南ア、英連邦脱退	
1962	<i>Ben Nicholson</i> 出版	移民法制定	
1963	<i>The Contrary Experience: Autobiographies</i> 出版		
1964	コネチカット州ウェズレイアン大学、特別研究員に任命される		
1965	<i>Henry Moore</i> 出版。合衆国ボストン大学、ヨーク大学名誉博士号。各地で講演。日本訪問	北アイルランドで公民権デモ	
1966	<i>The Redemption of the Roots</i> 出版		
1968	75歳で死去		

18) ウィリアム・ブレイク(William Blake 1757 - 1827)、イギリスの詩人

19) リード著、『ハーバート・リード自伝』、pp.61-62

20) リード著、『ハーバート・リード自伝』、p.185

Ⅲ. 『芸術による教育』

『芸術による教育』(*Education through Art*)は1943年、リードが50歳のときに出版された著作である。リードは、『芸術による教育』の中で、教育における芸術の重要性を主張したが、その焦点は美術にある。深層心理学やゲシュタルト理論をはじめとする同時代の最先端の諸学問に依拠して「芸術による教育」の本質的重要性を論証しようとするもので²¹⁾、芸術が教育の基礎であることを、広範囲の理論を援用して証明を試みた言説である。美術教育界の研究者においては、理論形成のための基本的文献と位置づけられている(山本朝彦2015、竹内久顕2012、本田悟郎2011)。日本では、原著出版の10年後、1953年に植村鷹千代、水沢孝策によって翻訳され出版された。17版を重ねた後1979年に絶版となっていたが、2001年に第3版を定本として、上野浩道、西村拓生、池亀直子によって改訳され出版に至っている。また、2006年には、リードの芸術理論研究者であるデーヴィッド・シスルウッド(David Thistlewood 1944-1998)²²⁾による『ハーバート・リードの美学 形なきものと形』(*Herbert Read: formlessness and form* 原著1984)が翻訳、出版されている。

リードについて、特に『芸術による教育』においては、多様な理論が展開されたがゆえに、それぞれの理論の整合性に対する批判や、彼の思想が第二次世界大戦後の一時的なものであるという否定的な意見も少なからずある²³⁾。しかし、現在、日本でリードの『芸術による教育』が改訳、出版され、研究書もまた翻訳、刊行されている事実は、リードの思想が過去のものではないことを示すものである。リードおよび彼の著作についての研究は、今なお意義があるものといえる。

1. プラトンの位置づけ

リードは『芸術による教育』において、プラトンによる「芸術を教育の基礎とするべきである」ことを命題として提示した。この命題を「私たちの現在の要求や条件にそのまま当てはめることができるような言葉へと翻訳するに過ぎません。」²⁴⁾と述べ、論述の根源はプラトンにあることを明らかにしている。さらに、プラトンの命題について、「哲学の歴史において、実に不可思議なことの一つは、この偉大な人物の遺したもっとも大切な教えの一つを、彼の後継者のうちだれ一人として真剣に取り扱わなかったことです。(中略)研究者たちはプラトンの命題を、おもちゃのようにもてあそんだのです。彼らはその命題の美しさや、その論理、その完全性を認めはしましたが、その可能性を実行に移そうと考えたことは、一瞬たりともありませんでした。彼らはプラトンのもっとも情熱をこめた理想を、失われた文明の中でのみ理解できる無用のパラドックスとして扱ってきたのです。」²⁵⁾と述べている。すなわち、彼はこの命題は論理として認められながらも、体系化され実践されることはなかったと主張する。その理由について、芸術という言葉の意味するものが理解されなかったこと、教育の目的が不確かであったことの2点を挙げた。彼は、「芸術」と「教育」の定義を明らかにすることで、プラトンの命題を「芸術による教育」として、その理念を具体化しようとした。

2. 教育観

リードは、プラトンの命題が実行に移されるためには、まず、「教育の目的」を明らかにすることが必要であると考えた。教育の目的は、「個人の独自性と同時に、社会的な意識あるいは個人の相互関係を発展させること以外にありえない」²⁶⁾と述べ、共同体における個人の独自性に価値をおくことが、生命の多様

21) デーヴィッド・シスルウッド著、『ハーバート・リードの美学 形なきものと形』、p.212

22) 1944年、イギリス北部のヨークシャー、リーズに生まれる。リードの創造的な考えが最も熱心に実行に移されていたというリーズ芸術大学で絵画を専攻。リヴァプール大学建築学部の講師、助教授を経て、リードの芸術理論研究で同大学から博士号。1998年没。

23) デーヴィッド・シスルウッド著、『ハーバート・リードの美学 形なきものと形』、p.212

24) リード著、『芸術による教育』、p.18

25) リード著、『芸術による教育』、p.18

26) リード著、『芸術による教育』、p.22

性に貢献すると主張した。すなわち、教育とは、「個別化の過程であるだけでなく、「統合(integration)」の過程でもなければならない」²⁷⁾ であり、統合の過程とは、自立した中で個人的特性を發展させ有機的全体性と調和させることである、と主張した。プラトンの哲学における美的原理、「あらゆる動植物や自然、そして宇宙そのものまで貫いている」²⁸⁾ 調和を、教育の基礎とすべきと考えたのである。

同時に、プラトンによる、「子供たちを学習させながら育てるにあたって、けっして無理強いを加えることなく、むしろ自由に遊ばせるかたちをとらなければならない。また、そうしたほうが、それぞれの子供の素質が何に向いているかを、よりよく見てとることができるだろう」²⁹⁾ という記述を引用し、個人の特性の發展には自由という原理が重要であることを示した。民主主義社会においては、教育を導く原理に自由が確立されていることが前提であるとし、社会の形態を視野に入れた考えを明らかにした。

3. 美的教育

プラトンは、著書『国家』において、「音楽・文芸による教育は、決定的に重要」³⁰⁾ であると述べている。その理由について、「リズムと調べというものは、何にもまして魂の内奥へと深くしみこんで行き、何にもましてかぶよく魂をつかむものなのであって、人が正しく育てられる場合には、気品ある優美さをもたらしてその人を気品ある人間に形づくり、そうでない場合には反対の人間にする」³¹⁾ と記している。リードは、「あらゆる動きの優雅さや生活の調和—魂それ自体の道徳的な傾向—は美的な感覚によって、つまりリズムと調和の認識によって決定される」³²⁾、とプラト

ンの言説を引用し、音楽によって美的な感受性を強化し發展させる教育の重要性を主張した。美的な教育によって意識や知性、判断力の基礎となる諸感覚を育くみ、それらが外界と調和的かつ継続的に関係づけられるとき、統合された人格が形成されると考えた。

リードは、芸術による教育においては、「美的教育」が根本的な役割を果たすという立場から、その領域を以下の5つに分類した。

- (1)あらゆる方式の知覚と感覚について、生来の強度を保持すること。
- (2)さまざまな方式の知覚と感覚を、相互に、および環境との関係において協調させること。
- (3)伝達可能な形式によって、感情を表現すること
- (4)表現されなければ、部分的にあるいは完全に無意識にとどまるとされる精神的な経験を伝達可能な形式によって表現すること。
- (5)必要な形式によって、思考を表現すること³³⁾

また、これらの表現の形式について、美的教育がもつ技術的な側面を示した。視覚的教育と造形の教育について、「外部の空間世界について共通する見方に関わる」³⁴⁾ ことから「デザイン」とした。「音楽の教育」と「運動の教育」については、ダンスと音楽が機能上の類似性があることから「リトミック」としている。

A 視覚的教育	目	} デザイン
B 造形の教育	触れること	
C 音楽の教育	耳=音楽	} リトミック
D 運動の教育	筋肉=ダンス	
E 言葉の教育	話すこと=詩と演劇	
F 構成の教育	思考=工芸 ³⁵⁾	

27) リード著、『芸術による教育』、p.23

28) リード著、『芸術による教育』、p.88

29) プラトン著、藤沢令夫訳、『国家(下)』、岩波書店、1979、pp.171-172

30) プラトン著、藤沢令夫訳、『国家(上)』、岩波書店、1979、p.241

31) プラトン著、『国家(上)』、p.241

32) リード著、『芸術による教育』、p.85

33) リード著、『芸術による教育』、p.27

34) リード著、『芸術による教育』、p.27

35) リード著、『芸術による教育』、p.27

さらに、美的教育の方法を心理的類型に基づいて次の4つに再編した。

- | | |
|-----------|------------------------|
| I デザイン | 感覚に対応する |
| II 音楽とダンス | 直観に対応する |
| III 詩と演劇 | 感情に対応する |
| IV 工芸 | 思考に対応する ³⁶⁾ |

デザインは視覚と触覚を通して受けた刺激に対応する感覚教育の方法であり、リトミックは聴覚と筋肉の感覚によって対象を直接、知的に把握する直知の方法ととらえた。また、詩と演劇を、主体が「快い」、「美しい」、「感じが悪い」といった状況や対象に対する態度、あるいは、価値づけをする情動に対応する教育とし、工芸は、概念・判断・推理の作用である思考に対応するもの、と考えた。

4. 理論から実践へープラトン

リードは、知覚の働きについて、心理学者、言語学者でもあるオグデン(Charles Kay Ogden 1889-1957)の美的な感性に関する考えに注目した。美的な感性が生命のリズムを表し、経験された出来事を正しく適したものと感じる。その性質は、私たちが知覚における美的な要素と呼んだものを構成する³⁷⁾、という認識を援用している。知覚とは受身的な反射ではなく、反応する有機体としての主体が感覚器官を通して刺激を受容し、その刺激に対して動的に反応することと考えた。動的な反応において空間と時間は知覚の対象以上のものとなり、そこに「感性」が働く。その反応にある種のパターンが存在を認め、「美的」と捉えたのである。刺激に対して、さまざまな反応のパターンの中から適切であるという理由から1つを選択し、それを正しいと感じる傾向を「美的」としてしたのである。さらに、この正しいと感じる傾向によって、この行為のパターンは繰り返され、他の行為の方式もそれに同化すると考えた。学習の意味はあらゆる行為における巧みさの獲得であり、バラ

ンスとシンメトリー、プロポーションとリズムという経験の基礎的な要因によって継続するパターンへ組織化される。そのパターンは、洗練と経済性と効率を含むという性質を持ち、正しく作用するものは、正しく感じられる。その結果、その個人にとって感覚の高揚、すなわち美的な悦びの享受となる、³⁸⁾と述べ、美的な感覚を強化し、発展させることが教育であることを明示した。美的な感覚は、関係に対する本能であり、論理的思考においても根本的な役割を果たすと考えた。つまり、動きの優雅さ、生活の調和、魂の道徳的傾向は、リズムと調和の認識という美的な感覚によって決定され、その感覚を伸ばす音楽の教育には至上の価値がある、というプラトンの美的原理に、改めて心理学の観点から具体的な意味をもたせたのである。しかし、証明を重視する科学の概念によって、プラトンの教育の理想は実践を阻まれ、今になってようやく、J=ダルクローズによって実行に移されたと述べている。同時に、リードは、J=ダルクローズの教育方法が認められ、広がりを見せていることを認識しながらも、ヨーロッパあるいはアメリカにおける教育制度全体の基礎におくような動きが見られないことを悲観的に示している。

5. 理論から実践へーダルクローズ³⁹⁾

リードは、J=ダルクローズの理論にプラトンの真理を見出し、著書、『リズムと音楽と教育』(*Rhythm Music and Education* 原著1921)「第13章 リズム、拍子、気質(1919)」から、リズムの特質およびリズムと生命に関する考えを引用し紹介している。リズムの特質は持続と反復であること、リズムの根本的要素である時間と空間は不可分であること、生命はそれ自身がリズムであり、多様な生の単位としてつながり、分割することのできない統一体を形成しているということ、身体器官・精神の相反する機能の結合が個性を形成してお

³⁸⁾ リード著、『芸術による教育』、p.84

³⁹⁾ リードが著作の中で通称であるDalcroze(ダルクローズ)を使用している場合は、本稿でもそのまま「ダルクローズ」と表記した。

³⁶⁾ リード著、『芸術による教育』、p.28

³⁷⁾ リード著、『芸術による教育』、pp.60-61

り、その不可分性において個性もまたリズムと見なされること、芸術と生命のリズムは性格と気質のすべての特性の融合を必要としている⁴⁰⁾、という見解である。そのうえで、彼の理論がプラトンから触発されたものではなく、彼が音楽を指導する過程で築いた独創であり、再発見であることを認めている。また、J=ダルクローズの実践をプラトンの教育の理想を実行に移す適切なもの、として高く評価した。リトミックを「体のあらゆる動きと表現との調和」と捉え、その価値を認めたのである。すなわち、リードはリトミックを、魂の奥深くに沈潜し、魂を最も強く支配するリズムと調和に対する感覚を伸ばす教育と位置づけたのである。しかし一方で、基本的本質において、論理的思考から無縁である唯一の芸術が音楽である⁴¹⁾、というJ=ダルクローズの認識には異論を唱えている。知覚された出来事を認識する過程、それ自体がすでに論理的思考から自由である、という考えがプラトンの概念であると主張した。両者の相違は芸術の範囲の捉え方の違いによるものとしている。さらに、リトミックは、視覚と触覚に基づく方法によって補われることが非常に重要である、と述べている。視覚と触覚に基づく方法について、この節では、一般的に「想像力」と呼ばれている、イメージを想像的に使用するための刺激を与えるような造形芸術である⁴²⁾、と述べるにとどまっているが、第5章の記述から、具体的には、線描(drawing)、描画(painting)、立体感表現(modelling)⁴³⁾を指すものと考えられる。

6. 「リトミック」及び「J=ダルクローズ」についての言及部分

『芸術による教育』において、「リトミック」及び「J=ダルクローズ」に関する記述は5か所である。1つめは、第1章の「教育の目的」

の中で、美的教育の方法の1つとして示されている。その分類は、A視覚の教育、B造形の教育、C音楽の教育、D運動の教育、E言葉の教育、F構成の教育の6つであり、C音楽の教育とD運動の教育の2つを併せて「リトミック」の言葉で表されている。

2つめは、第3章の「知覚と想像力」「10.理論から実践へ—プラトン—」の中である。プラトンの理想の実践者としてJ=ダルクローズの名前が挙げられている。

3つめは、同3章の「10.理論から実践へ—ダルクローズ—」である。J=ダルクローズの『リズムと音楽と教育』から、400字に及ぶリズムについての見解を引用している。また、J=ダルクローズの理論の根拠やプラトンとの見解の相違にも言及し、リードがリトミックについて研究していたことがうかがわれる。

4つめは、第5章の「子どもの芸術」「21.視覚以外の表現方式」—③音楽、の節である。この章でリードは、子どもの遊びを芸術の一形式とみなし、その観点から、数多くの子どもの描画を分析し、子どもの表現活動について論じている。また、表現とは「コミュニケーション」及びその試みである、と定義し、その意図は、他の人々に影響を与えること、すなわち社会的な活動である、という認識を示した⁴⁴⁾。J=ダルクローズの名前は、表現の媒体としての音楽の重要性を述べたあと、「音楽が教育方法の基礎をなしている範囲を明らかにするためには、ダルクローズの著作についてもう一度言及すれば足りる」⁴⁵⁾という表現の中に見られる。リードは、一般的な教育の方法は、子どもの多様な類型の特別な要求に応えられるように十分に柔軟性をもつものであることが必要である⁴⁶⁾、と述べており、J=ダルクローズの教育方法がそのような要求に応え得るものであることを認識していたといえる。

5つめは、第7章の「教育の自然な方式」の「12.中等教育」の節である。リードは、基本

40) Emile Jaques-Dalcroze, *Rhythm Music&Education*, London, The Dalcroze Society, 1921,p.183

41) Emile Jaques-Dalcroze, *Rhythm Music&Education*, p.186

42) リード著、『芸術による教育』、p.89

43) Herbert Read, *Education through Art*, p.159

44) リード著、『芸術による教育』、p.192

45) Herbert Read, *Education through Art*, p.164

46) Herbert Read, *Education through Art*, p.164

的には、中等学校を小学校の継続と位置づけ、そのカリキュラムは創造的活動の領域であるべきことを主張している。そのための中等学校の理想的な組織を次のように提言した。演劇、デザイン、音楽、工芸の4種の活動に精通した者(master)4人がその活動を担当する。さらに、そのもとに、デザインには描画、工芸には数学と科学、音楽にはリトミックと舞踊、演劇には、歴史、文学及び演説法のアシスタントマスター(assistant-masters)を置く⁴⁷⁾と述べ、リードが、学校教育制度を構想する上でも、具体性をもつ教育法として「リトミック」を重要視していたことが示唆される。

IV. 『平和のための教育』

『平和のための教育』(*Education for Peace*)は、『芸術による教育』とともに広く読まれ、リードの教育思想の著作として重視されている。リードが第一次世界大戦、第二次世界大戦という2度の大きな戦争を経験した後に書いたものであり、リードの「戦争の絶対否定」⁴⁸⁾が実現されるための具体的な教育の原理と方法が述べられている。教育の目的を「幸福を生み出すこと」⁴⁹⁾であると明言し、戦争を回避するためには、人類の道徳的再生が何にもまして優先されるべきであり、そのためには道徳を実行するための教育、すなわち芸術の訓練による教育が必要であると考えた。⁵⁰⁾『芸術による教育』と同じく、教育の原理はプラトンの思想にあるが、その方法についてさらに具体的に述べている。道徳の土台になるものは特別な一種の訓練であり、メカニズムであるとし、子どものうちに感受性や知性が形(かたち)づくられる身体のよい型(かた)、つまり美しい型を模倣するように条件づけられるべきと主張した。すなわち、子どもたちを普遍的な形式(form)にしっかりと合い、美しく、調和をもった運動をし、美しいものをすすんでつくるように育て上げることによって、子

どもたちは本能的に善を見て美を選ぶと考え、芸術の教育が倫理的な徳を成長させると結論づけた⁵¹⁾。さらに、リードは芸術が教育のひとつの方法として教えられるべき教科ではなく、すべての教科の教育方法であると考えたが、その芸術が教育上活かされていないと述べている。このような文脈の中で、リードはリトミックとJ=ダルクロワーズについて次のように述べた。

ところで、それらの音楽は、学校の中でどの程度の位置を与えられているか。たしかに、われわれは今、オイリトミクス*eurhythmic*(ママ)というものをもっている。このような教育の一分野にかんして人々を正しい軌道にのせたダルクロワーズの理想を実現しようとしてこれまでに精力を傾けてきた学校で、プラトンが原始的なギリシア音楽を根拠にして考案した教育の方法が、はたしてどれほど生かされたかは疑わしいものだ⁵²⁾。

このように、リードは、J=ダルクロワーズのリトミックがプラトンの教育の実践であることを再び示唆し、彼の平和のための教育において重要な位置を占めるものであることを示しながらも、現実の教育制度には懐疑的であることも表明した。

一方、J=ダルクロワーズは、1919年、『リズムと音楽と教育』の総括である序文において、第一次世界大戦後の社会的再建の時代に個人の再教育の必要性を主張し、次のように述べている。

私のシステムの考え方および構造の根底にある基本理念は、明日の教育が、子どもたちに、まず第一に自分自身をはっきり知ろう、ついで自分の知的・身体的能力を先輩たちの努力の結果との適正な比較により推量するよう教えること—そして、自分自身のもつさまざまな能力を評価し、そのバランスを保ち、それらを個人生活上の必要にも、社会生活上

47) Herbert Read, *Education through Art*, p.246

48) Herbert Read, *Education for Peace*, London, Routledge, 1950, p.11

49) Herbert Read, *Education for Peace*, p.87

50) Herbert Read, *Education for Peace*, p.26

51) リード著、『平和のための教育』、p.88

52) リード著、『平和のための教育』、p.136

53) J=ダルクロワーズ著、『リズムと音楽と教育』、p. x

の必要にも役立たせてくれる経験には素直に従うように導くこと、である⁵³⁾。

すなわち、自分を正しく認識し、正しく評価をし、自分たち自身の人生を生きると同時に、他の人々の人生である社会と調和させる人間教育、とリトミックを位置づけているのである。さらに、同書の第7章、「学校、音楽、喜び」(1915年)において、「美に対する感動は、感覚の繊細さ、神経組織の感受力、精神の柔軟性の賜物」⁵⁴⁾であり、「リズムによる、リズムのための教育は、それを受ける人すべてに芸術的感覚呼び覚ますことができ」⁵⁵⁾る、とリードによるプラトンの美的教育の考えに沿った見解を示している。

同時に、J=ダルクローズは平和な社会を願い、そのためにリトミックが貢献できることを次のように示した。

あの悲惨な時代へ私たちを駆り立てた戦争がもたらしたあらゆる興奮の次に為すべきは、真剣に明日を思い描くことである。ひとたび戦争が終われば、昂揚した気分が落ち込み、栄養不良で活力を失ってはならない。身体的鍛錬が大部分である芸術教育だけが、過度に刺激を受けた私たちの神経組織を鎮めることができよう。もし、この教育が本質的にスポーツ的なら、目的を踏み越し、感受性を欠いた世代をつくり出すだろう。大事なことは、教育が知的な発達と身体的な発達を平行して前進させることであって、リトミックは二重の意味で有益な影響をおよぼすものと私は思うのである。⁵⁶⁾

このように、J=ダルクローズは、リトミックの実践を重ねる過程で、音楽教育にとどまらない人間教育としての可能性を確信しており、リードの「芸術の訓練による教育」とほ

ぼ同じ言葉を語っている。

リードは、この『平和のための教育』において、改めて、芸術は、あらゆる有効な教育方法の基礎となりうるものであり、科学と芸術の過程には、本質的な相違は存在しない⁵⁷⁾ことを主張し、その教育を実現することができる教育としてJ=ダルクローズのリトミックを位置づけているのである。

V. 『芸術教育による人間回復』

『芸術教育による人間回復』(*The Redemption of the Robot* 原著1970)⁵⁸⁾のアメリカ版はリードの死(1968)の2年前(1966)に出版され、原典のイギリス版は没後2年の1970年に出版された。リードが、前述の『平和のための教育』に加筆し、新しいテーマのもとに編集し直したものである。イギリス版の副題“*My Encounter with Education through Art*”が意味しているように、リードの「芸術による教育」の啓発活動に沿った一連の著作を総括した遺著である⁵⁹⁾。

『平和のための教育』と同様、プラトンの主張に沿い教育の美的方法について言及しているが、さらに、その主張に精緻な裏付けを試みている。測定と分類、あるいは分析でもある科学は、全体との関係性の中でとらえるべきであり、そこには理解と知識、想像力と創造活動の働きの含まれているととらえ、それは現実への主観的で感覚的な取り組みであり、それを「美的方法」と称してもよいのだ、と述べている。さらに、『芸術による教育』から20年余を経て、子どもの芸術に対する評価は大きく変化し、芸術が教えられるべき教科ではなく、教育の手段でもあることが明らかになったと示している。子どもの芸術は子どもの発達段階に応じて表れるイメージの視覚的で造型的な自己表現の方法であり、意志伝

54) J=ダルクローズ著、『リズムと音楽と教育』、p.126

55) J=ダルクローズ著、『リズムと音楽と教育』、p.127

56) J=ダルクローズ著、『リズムと音楽と教育』、pp.127-128

57) リード著、『芸術による教育』、p.193

58) 邦訳は2冊ある。

リード著、『芸術教育による人間回復』、内藤史朗訳、明治図書出版、1972

リード著、『芸術教育の基本原理解放』、小野修訳、紀伊国屋書店、1973

59) リード著、『芸術教育による人間回復』、p.1

達的手段であるとともに、大人から理解されるための手段でもある、との考えを明らかにしている。さらに、その自発性ゆえに教育的な価値が付与され、芸術とよばれる創造活動は子どもの成長に不可欠である、という認識は今や一般化されている、との考えを述べた⁶⁰⁾。プラトンが音楽、絵画及び建築という言葉を用いて示したのから、現在は当時よりいくらか豊かなものに発展した、ととらえ、教育における芸術の機能に一層の期待を寄せている。その文脈の中で、リードは、この著作においても、『平和のための教育』と同様、J=ダルクローズのリトミックに関する記述を繰り返している。「たしかに、われわれにはリズム体操があり、教育のこの面において、われわれを正しい方向に進ませたダルクローズに敬意を表したい。」⁶¹⁾と、リトミック及びJ=ダルクローズを評価し述べた。しかし、リトミックを取り入れて実践した学校での音楽教育の進展には疑問を呈した。それは、現代に生きるわれわれもプラトンの指摘した美的感覚を有するものの、美的な理解力が不十分であるため、との考えを示している。この著作についてリードは、「教育上の信条の精髓を表した」ものであり、「わが生涯をかけた仕事を代表する」⁶²⁾と序文冒頭に明言している。したがって、再編された著作において、再度リトミックが言及されていることは、リードが「芸術による教育」を実現するためにリトミックを重視していたことが再び示唆される。

VI. 考察

『芸術による教育』、『平和のための教育』及び『芸術教育による人間回復』における「リトミック」あるいは「ダルクローズ」についての言及部分を取り上げたが、「リトミック」、あるいは「J=ダルクローズ」に関して言及されるときは、常にプラトンの美的教育の原

理との関わりにおいてである。リードの教育の根本理念がプラトンであり、芸術によるものであることは揺るぎない。『芸術による教育』以前の著作、『芸術の意味』(*The Meaning of Art* 原著1931)においても、美術作品、様々な国、地域の芸術や芸術家に関する評論に加えて「芸術の定義」、「美感」、「美の定義」など、後に続く著作の中心課題がすでに現れている。また、『芸術による教育』後の『アナキズムの哲学』(*Anarchy and Order* 原著1945)において、テーマはアナキズムであるが、芸術及び教育の社会的側面について書いたこれまでの著作と根本的な違いはなく、同じ哲学が現れている⁶³⁾、とプラトンの芸術の教育と美的な教育に言及している。プラトンの教育論の趣旨は、自然の調和が示され、模倣されるような手段によって、方法を決定することであり、美的な教育である音楽、ダンスその他身体的な優雅と筋肉上の鍛錬を喚起する、すべて具体的な、可塑的な芸術の教育を圧倒的に重視することにある⁶⁴⁾、と述べ、教育はその大部分身体的なものであることを明らかにした。さらに、『平和のための教育』に続く『芸術の草の根』(*The Grass Roots of Art* 原著1955)、『見えざるものの形』(*The Forms of Things Unknown* 原著1960)においても、プラトンへの言及は少なくない。ここでも、美的な感覚を強化し、発展させることが教育であることを繰り返し述べ、動きの優雅さ、生活の調和、魂の道徳的傾向は、リズムと調和の認識という美的な感覚によって決定され、その感覚を伸ばす音楽の教育には至上の価値がある、というプラトンの美的原理を明示している。

『芸術による教育』、『平和のための教育』及び『芸術教育による人間回復』は、リードによる教育のあり方の提言である。リードは、そこにJ=ダルクローズの、精神と身体を調和させることを目指した教育、リトミックを取りあげ、その理念をプラトンの原理に拠っ

60) リード著、『芸術教育の基本原理解放』、p.16

61) リード著、『芸術教育の基本原理解放』、p.19

62) リード著、『芸術教育による人間回復』、p.3

63) リード著、『アナキズムの哲学』、大沢正道訳、法政大学出版局、1945、p.1

64) リード著、『アナキズムの哲学』、p.253

て立つものである、と認めている。プラトンの教育の理想を実践するためには、身体的な鍛錬が必要であり、それを具現化したものがリトミックである、と考えたのである。すなわち、J=ダルクローズの「音楽において、最も強烈に感覚に訴え、生命に最も密接に結び付く要素はリズムと動きである」⁶⁵⁾という考えと、プラトンの教育思想において音楽が果たす機能とは同じ主張である、と認めたといえる。

また、リードが『芸術による教育』において根本的な役割を担うととらえた「美的教育」と、J=ダルクローズが大きく影響を受けたリュシーのリズム論は近似的であることもリトミックを重要視した要因の1つとしてあげられる。リュシーは、人間は生来、芸術的な美を感じ取る能力を持っており、時間と空間の要素を断片に分け、分割することによって自然界に基準と規則正しさ、秩序と対称性を与え、芸術活動、創造活動の理論的な基盤とする⁶⁶⁾という考えを明らかにしている。したがってリードは、「美的な感覚は、関係に対する本能であり、論理的思考においても根本的な役割を果たす」という考えに基づいて、リズムによる教育、リトミックによって彼の教育が実現される可能性があるかととらえたのである。

リードは、「芸術による教育」という主題とリトミックに共通の原理を見だし、「芸術による教育」にリトミックという具体的な方法を組み入れることによって、個人の特性の発達を促し、その特性が共同体の中で実現されること、つまり、個人の独自性が生命の多様性に貢献し、人類全体にとって計り知れない恩恵、平和な社会を築き上げるという教育の目的が達成される、と考えたのである。

おわりに

本研究では、リードの著作における記述を基に、リードがリトミックをどのように位置

付けていたのか、その見解を考察することを目的とした。リードの著作にあたる中で、リードが繰り返しプラトンの教育論に触れており、その芸術論を教育の核心にしていることを確認することができた。同時に、リードが芸術作品を前にして創造の衝動を深く検討し、普遍化を目指していく過程もうかがい知ることができた。リードの原点には、幼少期の恵まれた生活環境や自然環境があった。年を重ねる中で、いくらかの困難な状況も経験せざるを得なかったが、リードの著作からは自分を取り巻く世界への信頼が感じられる。リードは、その基本的な信頼感を土台に、平和な社会を実現するための具体的な方策を探し求めたのではないだろうか。自然界に存在するリズムや調和を目の当たりにし、その存在を抛り所に平和な社会の実現を目指したのだと思われてならない。リードは、「芸術による教育」によって平和な社会の実現を確信していたが、J=ダルクローズもまた、リズムによる教育がすべての芸術の基礎であり、平和な社会の基礎を成すもの、と考えていた。科学技術が発展した情報化社会においては、身体はその存在の意味を見失われかねない状況にあるが、このような時代にこそ、教育における芸術の機能、身体の機能が重視され、改めて必要とされるのではないだろうか。今回の研究において、リードの理論的背景であるプラトンの教育の一端に触れることができたが、多様で広い範囲にわたるリードの思想を深く理解するには至っていない。今後は、さらに原著にあたり、リズムによる教育、音楽による教育について、J=ダルクローズとリードの見解の相違を検討してみたいと考えている。

<参考文献>

- エドワード・クラパレード著、原聡介、森田伸子訳、『機能主義・教育論』、明治図書出版、1987
- フランク・マルタン、チボル・デヌス、アルフレッド・ベルヒトルド、アンリ・ガニュバン、ベルナル・レイシエル、クレル＝リズ・デュトワ＝カルリエ、エドモン・ス

65) エミール・ジャック＝ダルクローズ著、『リズムと音楽と教育』、p.73

66) マティス・リュシー著、稲森訓敏監修、『音楽のリズム』、中央アート出版社、2008、p.22

- タドレ著、板野平訳、『作曲家・リトミック
創始者 エミール・ジャック＝ダルクロ
ズ』、全音楽譜出版社、1977、
- ハーバート・リード著、長谷川鑛訳、『見え
るものの形 美の哲学への序説』、法政大
学出版局、1973
- マティス・リュシー著、稲森訓敏監修、『音楽
のリズム』、中央アート出版社、2008
- Herbert Read, *Anarchy and Order*, London, Faber
& Faber, 1945
- Herbert Read, *Education for Peace*, London,
Routledge & Kegan, Paul Ltd, 1950
- Herbert Read, *Icon and Idea*, New York, Schocken
Books, 1965
- Herbert Read, *The Form of Things Unknown*,
London, Faber & Faber, 1960
- Herbert Read, *The Grass Roots of Art*, London,
Faber & Faber, 1955